風韻の相剋

山の音
千羽鶴・波千鳥

川端文学
研究会編

教育出版センター

昭和五十四年九月二十五日初版発行

川端康成研究叢書6

風韻の相剋　山の音・千羽鶴・波千鳥

編　者　川端文学研究会　川端康成研究叢書編集委員会©

発行者　柴崎芳夫

印刷所　三朋印刷

発行所　㈱教育出版センター

東京都豊島区北大塚三―二九―二

電話　代(〇三)九一七―八九三〇

振替　東京〇―一四六一二

乱丁・落丁本はお取替えいたします。　3391―2006―1475

風韻の相剋／目次

山の音

『山の音』の人物論……川嶋至 7
『山の音』の作品構造……月村麗子 25
「山の音」と〈老い〉……村松定孝 47
『山の音』における夢の解釈……鶴田欣也 59
「山の音」の社会背景……武田勝彦 87
——新聞記事を中心として——
「山の音」の海外の評価……武田勝彦 105

千羽鶴・波千鳥

「千羽鶴」にみる感覚材料の用い方……オクナー・深山信子 115
ふたご座の美学……吉村貞司 135
——「千羽鶴」における古典回帰——
「千羽鶴」と「波千鳥」……長谷川泉 151

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

『千羽鶴』に対する海外の評価の紹介……今村楯夫 171
——上田真、エドワード・サイデンスティッカー、ニコラス・キャナディ、フランシス・マティー、アマンド・ジャネイラ——
作品研究史〔六〕……林武志 179
『雪国』研究史Ⅱ　同時代評 —下—
川端康成伝〔六〕……羽鳥徹哉 191
「川端康成研究叢書」(6) 後記……217

山の音

『山の音』の人物論

川嶋　至

『山の音』冒頭の同名の章で、主人公尾形信吾は会社からの帰途、さざえを三つ買い求める。敗戦後の鎌倉、八月のとある木曜日の夕方のことである。その夜の尾形家の食卓の光景は、次のように描き出されている。

夕飯の食卓に、菊子は壺焼を二つ出した。信吾はちょっと迷ってから、

「さざえがもう一つあるだろう。」

「あら、おじいさまとおばあさまとはお歯が悪いから、お二人で仲よく召しあがるのかと思いましたわ。」と菊子は言った。「なに……。情ないことを言うなよ。孫がうちにいないのにどうしておじいさんだ。」

保子は顔を伏せて、くっくっ笑った。「すみません。」と菊子は軽く立って、もう一つの壺焼を持って来た。

「菊子の言う通りに、二人で仲よくいただけばよろしいのに。」と保子が言った。

信吾は菊子の言葉を当意即妙と内心感歎していた。さざえを三つか四つかというこだわりも、それで助かったようなものだ。無邪気そうに言ってのけたところが、隅におけない。

一つを修一に残して自分が遠慮するとか、一つをお母さまと自分と二人でとか言いそうなものだが、菊子も考えたのかもしれぬ。

しかし、保子は信吾の心隈に気づかなくて、

「さざえは三つしかなかったんですか。四人いるのに、三つ買ってらっしゃるから。」と間抜けなむしかえしをした。

「修一は帰らんから、いらんじゃないか。」

保子は苦笑した。しかし、年のせいか苦笑とは見えない。

菊子は陰った顔もせず、修一がどこへ行ったとも聞かなかった。

この夕食のときから一年余が経過して、翌年のとある日曜日、最終章「秋の魚」で、尾形家の夕食の光景は、ふたたび次のように描かれている。

その日曜の夕飯には、一家がそろっていた。

出もどりの房子と二人の子供も、今は勿論家族だろう。

「鮎が三匹しか魚屋になかったんですの。里子ちゃんにあげますわね。」と菊子は言いながら、信吾の前におき、修一の前におき、それから里子の前においた。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

「鮎なんか子供のたべるものじゃありませんよ。」と房子は手を出して、
「おばあさまに上げなさい。」
「いや。」と里子は皿をおさえた。
保子がおだやかに言った。
「大きい鮎ですね。もう今年のおしまいでしょうね。わたしはおじいさんのをつつくからいらないよ。菊子は修一のをね……。」

そう言えば、ここには三組集まっていて、家が三つあるべきかもしれなかった。

長編小説『山の音』のはじめとおわりに描出されているこの尾形家の夕食の情景は、明らかに対応するもので、作者も意図的に配したに違いない。食卓に置かれた皿をめぐって、微妙にゆれ動く家族間の感情のひだを捉えているところが、共通しているからである。

このことからも、『山の音』は尾形信吾一家のものがたりであり、一種の家庭小説であるとみなせよう。つまり、最後に「三組」とあるように、四十年もの会社づとめを経てすでに六十を過ぎた信吾と、ひとつ年上の妻保子の夫婦、信吾と同じ会社に勤める息子修一と嫁菊子の夫婦、それに相原との結婚に失敗して里子・国子の二児を連れて帰ってきている娘房子の、「三組」七人が同じ屋根の下に暮らしていることから起こるさまざまな軋轢や波瀾を通して、一家の愛憎のくまぐまを描き出していくところに、この小説のひとつの主題があったと思われる。その意味で、近い将来この「三組」が別れ別れになることを暗示している小説の結末は、この主題にふさわしいものといえ

る。

家庭は日常の生活の場である。家族そろって夕餉の食卓をかこむ光景は、一家団欒図の典型といってもいい。しかも、尾形家は父子とも会社員で、ありふれた職業の平凡な中流家庭である。したがって、『山の音』の登場人物を論じる場合、その言行を日常の生活感覚のなかで捉えて論じても、まずさしさわりはないであろう。

ことさらこんなことを断わったのは、川端康成の小説でこれほど日常性が前面に色濃く出ている作品も、珍しいからである。短編や通俗的色彩の濃い作品を除いて、おそらく家庭が舞台となっている唯一の作ではないだろうか。たとえば、『雪国』にしろ『千羽鶴』にしろ、登場人物たちが生きて動いている場所を考えただけでも、彼らの思想や行動を日常の生活の場にひき出して論断するのは、かなり困難な、というより無意味な作業であると言わなければなるまい。『山の音』の登場人物は、非現実の住人でもなければ、美的世界に耽溺する芸術家でもない。われわれが日常近隣でふれあう、ごくふつうの生活人なのである。

しかし一方、『山の音』が家族の人間関係の陰影を描き出した家庭小説だと言い切ってしまうには、かなりのためらいが残る。それは、四季折々の自然の風物にふれ、あるいは一家の困難な問題に遭遇したときの信吾の感慨や心境が、小説全体を厚くおおっているからである。早いはなしが、「山の音」という表題自体、信吾の死への恐怖を暗示するものであって、けっして尾形家全体のなにかを象徴するものではない。みだらな夢やふしぎな幻聴、うち続く多くの知友たちの死、あるいは

はるかなる妻保子の姉への憧憬につながる嫁菊子への、背後に性的願望さえ圧殺している愛着にしても、すべて信吾だけのものである。その意味で、この小説はまた尾形信吾の心境小説と読むこともできるわけである。

すでに指摘されているように、信吾は視点人物であり、作中の諸相は信吾の視線を通して読者に伝えられる。冒頭に引用した部分の用例についてみれば、信吾が三つ買ってきたさざえを菊子が二つだけ食卓にのせた真意がどこにあるかは、読者には本当のところ測りかねるのである。小説の現実として作者が伝えている事実は、信吾と保子は歯が悪いから「お二人で仲よく召しあがるのかと思いましたわ」という、菊子の言葉だけである。それが本当に修一のいない食卓の気まずさを救う「当意即妙」のものであったのかどうか、また本当に菊子は「無邪気そうに言ってのけた」のかどうか、伝えられるのは、信吾がそう思い、そう感じたということである。

したがって、『山の音』では尾形信吾については論じて余りある材料が提供されているが、他の登場人物については、ほとんどその手がかりは与えられていない。つまり、『山の音』の人物論は大方が信吾論になってしまうということである。彼以外の人物について読者があげつらえる材料は、作中に示されている客観的事実と、会話として発せられる言葉だけであろう。

このように『山の音』の人物を論ずる前提として、彼らが日常性に息づいている与しやすさと、信吾以外の人物とは直接ふれるのがむずかしいという不自由さとが、盾の両面として同居していることを確認しておかなければならない。

『山の音』には、固有名詞を与えられている人間だけで二十名を超える人物が登場し、長編らしい多様さを示している。ほかにたとえば「保子の姉」のように、名前は与えられていないが、重要な役割を果たしている人物もいる。そして、これら登場人物たちは、尾形家の親族縁者と信吾の知友とに大別できよう。故郷の叔母や相原の母親などはむろん一族の縁につながるものであり、信吾の知友は学生時代からの友人と勤務先関係の人がそのほとんどである。この区別はわりあい判然としていて、例外的な存在は修一の愛人絹子と、その同居者である池田未亡人くらいのものであろう。そしてこの二つの交際圏をつなぐ人物は信吾だけであり、二群に分けられる作中人物相互のつながりはほとんどない。わずかな例外は、信吾の部屋づきの女事務員谷崎英子ぐらいである。つまり、人物の配置が信吾を中心に友人圏と家族圏とそれぞれ別方向に、放射状にひろがっているわけである。そのため、当然のことながら信吾が除外したところで生じたり変化したりする人間関係が小説をふくらませ、動かしていくことはない。小説のはじめの方には、修一の女性関係のように信吾の知らない人間関係も出てくるが、事情を知っている谷崎英子に働きかけることで、まもなくこの未知の部分も信吾の視界に収まってしまうのである。

さらに、この大別される二群の人物たちの群を超えた交渉がないばかりではなく、同じ信吾の知友群のなかでの交流もほとんどない。死に関連して登場する友人、鳥山、水田、北本らにしても、それぞれの死にざまが独立した挿話として描かれているだけである。尾形一家にしても、たとえば房子、修一のように、姉弟でありながらほとんど言葉を交わすことのないような疎遠な関係もある。

このように信吾を除けば、小説の中の人間関係が動いていかないところにも、この小説が信吾の心境小説のごとき印象を与える一因があろう。

では、こうした人間関係の中心に位置する信吾とはどんな人物なのか、まず、社会人としての彼は、六十二歳の現役の会社員。普通ならすでに停年退職している年齢であり、また社内での執務状態からみて、いわゆる会社役員なのかもしれない。鎌倉から横須賀線で東京の会社に通勤しているが、出勤時刻も自由がきくようで、帰宅も多く日没前というように、遠距離から通うにしてはかなり時間的ゆとりを持っている。どれほどの規模のどんな業種の会社かは不明ながら、信吾の仕事は客の接待が多く、待合に出入したり、熱海の宿に出かけて社用の宴会場の下見をしたりすることもある。だが、仕事や対人関係の面で、頭を悩ましている風情はなく、サラリーマンとしては特別に恵まれた職場と地位にいるようだ。信吾の仕事の手腕、あるいはそこから得ている収入の高など、知る手がかりはない。

『山の音』で信吾の社会生活に筆が及んでいない点について、作者自身同じ時期に書き継いでいた『千羽鶴』と重ねながら、「『山の音』でも尾形父子の会社の仕事がわからない。辰已柳太郎氏のかねての希望で、『山の音』も新国劇に上演されるが、舞台になに会社が出来るか、原作者の私は一向にかかはりがない。作中人物の会社、つまり職業の働き振りを書かなかったのは、一つには作者の怠慢であるけれども、また一つには、『千羽鶴』の場合など、作品の情趣をそこなふかとおそれて、故意に省いたのである。」（十六巻本全集「あとがき」）と語っている。まだ『山の音』が完結していない

昭和二十八年の発言であるが、「作者の怠慢」というのは川端一流の謙遜の辞であるとしても、『千羽鶴』にかぎらずこの『山の音』でも、信吾の「職業の働き振り」を書きこむことが、かえって「作品の情趣をそこな」ってしまうという顧慮が、かなり作者には働いていたものとみられる。たしかに『山の音』では、『千羽鶴』よりも主人公の社会生活に関する記述が多くなってはいるが、改めて信吾のそれに注目してみると、空白のまま残される部分が多いのである。実際に作品の情趣がそこなわれるか否かという問題は措くとしても、ともかくも日常性を前面に出した作品としては、社会生活の空白が信吾の実体を曖昧にしていることは否めない。会社の業種や信吾の仕事の内容などが読者の想像にゆだねられるのはいいとして、問題は信吾には勤め人としての生活意識が決定的に欠落しているところにある。

会社勤めも四十年に及べば、否応なくサラリーマン気質もしみつくはずである。たとえ身すぎ世すぎと割り切っていたとしても、職業上の煩労は職場を離れてもつきまとうものだし、毎日往復する疲れきった通勤電車のなかでは、自然や人事を些細に観察する興味も気力も失われているというのが実状であろう。会社で執務中の描写がほとんどないのに対して、横須賀線の車内の記述がきわめて多いのも、この作品のひとつの特色である。経済生活にしても、まだ口もよくまわらぬ子供がいちはやくボーナスなどという言葉を覚えていて苦笑させられるのが、サラリーマン生活の内状というものだろう。そういう生活臭が、信吾はむろん、このサラリーマン一家には微塵も感じられない。信吾が自然のわずかな変化にも感応してその美を発見凝視するさまは、むしろ芸術家を思わせ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.